様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２５１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１４５４７

研究課題名（和文）現代農村における知識創造理論の構築に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Construction of Knowledge Management Theory in Contemporary Rural Areas

研究代表者
山口　創（Yamaguchi, So）

公立鳥取環境大学・環境学部・准教授

研究者番号：１０７０９２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は農村地域における知識創造の仕組みと促進要因を明らかにすることを目的に取り組んだ。自然資源保全や文化的知識を対象に調査・分析した結果，第一に，知識創造活動において立場や得意とする知識領域の異なるナレッジリーダーが複数存在し，知識の獲得や創造の方向づけ，知識共有や創造の場づくりの役割を担っていることが示された。第二に，このような主導的役割を果たすナレッジリーダーは，知識領域や活動特性により確保方法が異なることが示された。第三に，動機付けの視点から知識創造活動を促す方策を検討した結果，他者への知識披露やロールモデルの存在が内発的動機付けに影響していることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
１つは，農村地域の湿原保全や里山保全といった自然資源管理を事例に，地域の自然条件や社会条件に適した保全手法の創造プロセスを明らかにできた点であり，得られた知見は省力化など現代のニーズに対応した資源管理手法の構築に貢献できる。２つは，個人の動機付けの視点から知識創造や継承を促す組織特性を明らかにできた点であり，伝統文化の継承活動に代表される住民主体の知識管理活動の運営等に貢献できる。

研究成果の概要（英文）：This research examines knowledge creating systems and promotion factors in rural area.
first, As a results of analysis on natural resources conservation, there are multiple knowledge leaders with different positions and expertise in knowledge creating activities, and they play role in creating a place for knowledge sharing and creation and creation directions. Seconds, the methods of securing knowledge leaders differ depending on the leader's expertise and the organizational structure of conservation activities. Third, as a results of analysis on folktales succession activities as form of cultural knowledge, the motivation for knowledge management activities is positively influenced by the presentation of knowledge to others and the existence of role model who has high skill.

研究分野：農村計画学

キーワード：ナレッジマネジメント　地域資源管理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

農村地域では，過疎高齢化の進行によるコミュニティの弱体化，生活様式の変化により，農村地域の資源管理や生活を支えてきた地域固有の知識が喪失されようとしている。こうした知識の多くは，言葉では伝えることができない暗黙知も多く存在しており，一度失われると再蓄積が難しい。今後，このような知識は必要性を見極めながら，継承できる仕組みを再構築することが必要である。本研究では，こうした現状を理解したうえで，農村地域における地域固有の知識の創造に着目した。現在，農村地域では，地域資源との関係性も変化しつつあり，従来とは異なる新たな資源管理，利用などの知識が必要とされている。今後，持続的な農村社会を形成していくには，既存知識の継承だけではなく，地域活動の基盤となる現在の農村社会に対応した知識創造の仕組みを構築することが不可欠である。

２．研究の目的

こうした背景のなか,本研究は農村地域における知識の創造メカニズムと知識創造の促進要因を明らかにすることを目的とした。具体的には,（１）知識創造の仕組みの解明,（２）知識創造活動における中心的人材の確保の実態の解明,（３）知識創造活動を促す動機づけの特性の解明，以上３点に取り組んだ。

３．研究の方法

知識を資源として位置付け知識の共有や創造による組織活動の発展や価値創造を目指す経営手法はナレッジマネジメントと呼ばれ,一般経営学を中心に多くの研究蓄積がある。本研究では,野中・竹内（1996）の SECI モデル，クローら(2001)のイネーブラー理論などの企業研究を対象に蓄積されたナレッジマネジメント理論を援用し，農村分野における知識創造の仕組みの解明に取り組んだ。

また対象とする知識領域に関しては，農山村に存在する知識のなかでも専門知から地域知まで幅広い知識が求められる自然資源管理に関する知識と，地域文化と密接に結びついた文化的知識を対象に研究を進めた。なお調査対象は，自然資源管理知識については兵庫県の A 湿原管理活動，B 地区の里山の管理活動，鳥取県 C 山の頂上保全活動，文化的知識については，鳥取県 D 地区の民話の継承活動を取り上げた。なお調査は関係者への半構造化インタビューにて実施した。

４．研究成果

（１）自然資源管理における知識創造プロセス

地元住民が専門家や行政と連携しながら主体的に保全活動を展開している兵庫県 A 湿原の保全活動を事例に，住民の自然資源保全における知識管理の実態を「場」の生成とリーダーの働きの視点から分析した。A 湿原は，兵庫県最大級の湧水湿原であり，環境省のレッドリストに登録されている希少生物が生息し，生物多様性の観点から重要性が高い。

保全活動を担う住民組織である A 湿原保全の会の代表，コアメンバー，行政関係者にインタビュー調査を行い，「場」の生成とナレッジリーダーの視点から湿原保全知識の創造プロセスを分析した。結果，行政の働きがけによって生成された創発場がきっかけとなり，住民主体の活動が創発し，体系場で専門家の有する専門知識を獲得しながら，保全活動の手法を発展させていたこ

とが明らかになった。また，保全手法を確立していく上で，行政，地域，専門家，それぞれにおいて主導的役割を果たすナレッジリーダーが存在し，知識の獲得や創造の方向づけ，具体的な場づくりの役割を担っていることが示された。

以上の結果から知識管理上の要点として第一に，行政，専門家，地域という 3 者それぞれにおいて，知識管理を担うナレッジリーダーを据えることが重要と考えられた。特に，専門家の確保は具体的な保全方法を構築するためには不可欠であり，住民主体の保全活動であったとしても，専門家を高頻度で派遣できる体制を整えることが重要といえる。第二に，「対話場」の生成である。今回の事例では，現場の状況に適合した新たな保全技術は，「対話場」のなかで創造されていた。保全地域の状況の変化に応じて自然資源を適切に管理していくためには，状況に適合した知識を絶えず生み出していくことが必要であり，知識創造が可能となる「対話場」の生成が必要と考えられた。

（2）ナレッジリーダー確保の実態

次に，知識創造において重要な役割を果たしていることが示されたナレッジリーダーの確保の仕組みを明らかにすることを目的に，兵庫県 B 地区の里山管理活動，鳥取県西部の C 山の頂上保全活動を事例に取り上げインタビュー調査をおこなった。

調査の結果、第一に自然保全活動を担う人材確保に関して，C 山の保全活動では自然保全に関わる行政機関や民間組織，地元自治会が組織単位で加入する保全組織が設立されており，会員組織のなかから保全活動に従事する担い手を確保する仕組みが整えられていた。一方，B 地区では組織単位ではなく個人単位で参加する仕組みとなっており，基本的には B 地区の住民が参加していた。

第二に，自然保全活動の計画策定や手法改善といった知識管理活動を主導するナレッジリーダーの確保の仕組みに関して，C 山の保全活動では，育苗活動や保全作業といった各活動領域に対して専門知識を有する組織が会員となっており，その組織からナレッジリーダーを輩出する仕組みとなっていた。B 地区では，保全作業に代表される現場知が重視される活動では，保全活動の場が実践コミュニティとして機能し，活動参加を通してナレッジリーダーとしての能力が育成される仕組みが構築されていると考えられた。また，植生調査など学術的な専門知識が重視される活動では，保全活動のように現場での活動を通して育成されず地区外から専門知識を有する人材が確保されていた。以上のように，自然保全活動におけるナレッジリーダーを確保する仕組みは、人材確保の方法や活動内容の特性により異なることが考えられた。

（3）動機付けからみた知識創造の促進方策

コミュニティにおける知識創造を促進する動機づけの解明に取り組んだ。農山村に存在する文化的知識といえる民話の継承活動をおこなう鳥取県 D 地区の民話会を事例にとりあげ，民話会メンバーに対して民話の習得（暗黙知の再創造）の動機づけに関する半構造化インタビューを実施し，質的研究法を援用し分析をおこなった。

分析の結果，第一に他者に習得した知識を披露する機会が，内発的動機づけ，外発的動機づけの両面において影響していることが示された。このような知識披露の場を意識的に作り出すことが，メンバーの動機づけ上最も効果的と考えられた。

第二に，高い技術を有するロールモデルの存在が知識習得の内発的動機づけに影響していることが示された。ただし今後，知識継承の担い手の高齢化が避けられない状況において，熟達メンバーがリタイアし不在となることが考えられる。メンバーの知識習得の意欲を高めるために

は，熟達メンバーの活動を映像等で残し閲覧できる環境を整え，ロールモデル化するといった方策が有効と考えられた。

第三に，コミュティにおける文化的知識の習得（再創造）において，内発的動機づけだけではなく外発的動機づけの役割も大きいことが明らかになった。外発的動機づけは，手法として用いやすい一方で，アンダーマイニング効果と呼ばれる内発的動機づけを阻害する危険があることも知られている。そのため，動機づけの方策を検討する場合，外発的動機づけだけではなく，内発的動機づけを高める方策と併用して用いるべきであると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 陣内 綾、山口 創	４．巻 ceis35
２．論文標題 大山頂上の自然保全活動における人材確保の実態と課題に関する一考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 環境情報科学論文集	６．最初と最後の頁 292～297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11492/ceispapers.ceis35.0_292	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口創	４．巻 93-1
２．論文標題 農村地域の文化的知識の継承活動における動機づけに関する研究－鳥取県S地区における民話の継承活動を事例として－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 農業経済研究	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 陣内綾、山口創
２．発表標題 大山頂上の自然保全活動における人材確保の実態と課題に関する一考察
３．学会等名 環境情報科学センター
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口　創
２．発表標題 農村地域の知識継承活動における動機づけに関する研究 ―鳥取県S地区における民話の継承活動を事例として―
３．学会等名 日本農業経済学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関